



これからのお寺は NPO になれ

21 世紀は宗教改革の時代

2013 年 11 月 22 日(金) 上山 信一

欧州を旅すると教会の数の多さに圧倒されるが、日本の古い町も同じくお寺や神社が多い。東京・港区でも高層ビルの谷間のあちこちに寺と墓が見える。大阪も同じだ。寺町という一画に寺院が多数集まる。さらに京都、奈良についてはいうまでもない。

さて、昔の人はなぜ神社仏閣や教会に莫大な資金を投じてきたのか。洋の東西を問わず「祈る」ことが生活の中心に位置していたからだろう。医学のない時代、人々は病気になるとなすすべはなく、ひたすら祈った。赤ん坊や子供たちの多くが成人までに死んだ。人々は死者を弔っては祈り、貧しさなど人生の労苦からの解放を願っては祈った。

多くの現代人にとって祈りは日常のものでなくなっている。そして知らず知らずのうちに物事をお金に換算して判断しがちだ。まるで貨幣を崇拝するかのごとくだ。だが昔の人にとっては、経済や貨幣は人生の主たる目的ではなかった。そして、人々はひたすら神と仏に向かって祈った。こう考えると古都に残る寺社や教会の多さは決して不思議ではない。

ちなみに現代人はお寺の代わりに高層オフィスビルをたくさん建てる。その中では貨幣を祀っている。そしてパソコンの中の数字の増減に一喜一憂する。神のお告げや迷信に一喜一憂した古代人の姿を笑えようか。金銭を敬う現代人の姿は、古代人から見ると不可解極まりないものに違いない。

お寺のビジネスモデルを考える

さて、今回のブルーオーシャンのテーマは寺である。寺は今の姿のままでもいいのか？

我が国の寺は3タイプに分けられる。檀家寺、観光寺、そして育成寺だ。

檀家寺はふつうのお寺だ。全国津々浦々にあつて、檀家を持ち、墓を管理し、通夜・葬式その他、四十九日や一周忌、三回忌などの法要を営む。檀家寺の収入源は、お布施が4割、法事が3割、そして副業が3割である。ちなみに、法要のお布施は10万円くらい、戒名は30万円が相場らしい。また副業は駐車場、保育園の経営、そして墓の分譲が多い。

観光寺の代表格は京都や奈良の有名寺院である。東大寺、法隆寺、興福寺、薬師寺などが代表例。檀家や墓を持たず、全国から信者がお参りにやってくる。修行僧もいるが、数は多くない。参拝者に仏像を見せ、説法をする。収入源は拝観料のほか、寄進や写経、研修の料金である。

育成寺は、文字通り次世代の僧侶の修行の寺である。大本山永平寺(福井)や比叡山延暦寺(滋賀)など僧侶の卵やステップアップを目指す僧侶たちの合宿研修センターとして機能している。ちなみに、永平寺にはたくさんの修行僧がいて、いろいろな儀式や作業に取り組む姿が見られる。活気と躍動感がある生きたお寺だ。

寺はもともとNPOだった

というわけでお寺には3タイプあるのだが、一般には檀家寺、つまり「お寺＝法要＝お墓」のイメージが強い。しかしこれは本来のお寺の姿ではない。お寺は、昔は地域のNPO(非営利組織)の役割を果たしていた。その原型は聖徳太子が建てた四天王寺である。

そこには四箇院(しかいん)という施設があつた。四箇院とは、敬田院、施薬院、療病院、悲田院の4つである。敬田院は寺院そのもの。施薬院と療病院は現代の薬草園及び薬局・病院に近く、悲田院は病者や身寄りのない老人のための社会福祉施設である。ここに限らず古代から中世にかけて多くの寺が、孤児を保護し、行き倒れの人を助け、また学校や図書館として機能した。

やがて中世になると、本願寺など一部の大寺院が財力と権力を持つようになる。そして信長など新興武士に弾圧される。同じ頃、キリスト教も日本にやってきたが、やはり弾圧された。かくして宗教は日本では政治の支配下に置かれるようになる。こうした事情は日本でNPO活動が発達不全となった原因のひとつといえる(もうひとつの理由は役所の外郭団体と天下りの存在である)。

一方、徳川はお寺をむしろ実利に使つた。お寺は全国各地にあつて住民の信頼を得ている。それでこれを行政の統治手段として使つた。寺には、宗門人別改帳を作らせ、檀家制度で人々を管理し、戸籍の管理もした。かくしてお寺は江戸時代には行政の下請け機関と化した。

お寺ビジネスの誕生

やがて明治に入り、政府は神道を重んじ、お寺を冷たくあしらうようになる(廃仏毀釈など)。ほどなく多くのお寺は葬式などの法要を主たる役割とするようになる。そのうち、人が亡くなった日を起点に特定の時間ごとに法要を営み対価を得るビジネスモデルまで創り出した。今では、お寺は葬儀業界と連携し、仏壇や位牌、墓を売る。その結果、現代の“寺業界”は約1兆円、葬儀業界は約1兆8500億円、墓石関連産業は約7000億円もの産業に育っている。

しかし、である。

インドやスリランカに由来する本家の仏教では、仏壇、位牌、先祖代々の墓といったものは使わない。これらは祖先崇拜の儒教思想に由来する風習である。釈迦の説いた本来の仏教では、人は死んだら49日を経て人や動物に生まれ変わる(輪廻)。だからちょっと不謹慎な物言いかもしれないが、元祖仏教的には、私たちはお墓の前で泣く必要はない。なぜなら「そこに私はいません。眠ってなんかいません」という状況だからだ。この意味でヒットソング『千の風になって』は元祖仏教的に正しい。

ちなみに、お葬式のお浄めの塩という風習も元祖の仏教に由来しない。あれは神道に由来する。「気枯れ」、つまり悲しみで気が枯れた状態から清浄な日常に戻るためのものである(ちなみに塩はケガレ・禍事を祓うものであり、死者や死体をけがれたものと考えているわけではない)。そういう意味では、お葬式や法要は仏教だけでなく儒教や神道の風習もパッケージにした“パック商品”で、それをお寺と僧侶が一手に引き受けている。いかにも雑食性の日本らしい展開である。

かくして、今の日本の檀家寺の姿は元祖仏教の寺の姿とはだいぶ違うものになっている(良し悪しはさておく)。

もっと生きている人たちを助けよ

さて、これからはどうか。私はお寺の僧侶たちは今よりもっと大きな社会的な役割が果たせると思う。たとえば奈良、薬師寺の僧たちは東日本大震災の後、東北の村を廻り、遺族たちを励ます活動を続けた。各地の檀家寺も、法要だけでなく生きる人を救済する、本来の仏教の姿を追求してほしい。

あえて問題提起をしたい。日本では年間約3万人弱が自殺するが、その責任の一端はお寺にもあるのではないか。僧侶は仏壇や墓に向かい死者を弔う。それはもちろん十分に尊いこ

とであり、遺族の心を癒す。そして世の中に欠かせない大事な役割でもあるが、それだけでよいのか。本当は、悩み苦しみ自殺を考える人々にも向きあうべきではないか。

もちろん精神科医やカウンセラーがいる。しかし、寺は全国各地にあって僧侶は生活に身近である。何らかの役割が果たせるのではないか。

他人の家の中に入って行ける特権を活かす

大上段に構えてしまったが、要するに、これからのお寺は駆け込み寺になってほしい。離婚問題、相続問題、家庭内暴力、何だって相談に乗ればいい。答えが出ない問題も多いが、悩みを聞いてあげるだけで救いとなる場合もあるだろう(私ごとときには本当に苦しんでおられる方々の気持ちを偉そうに代弁する資格はないのだが)。

なぜなら、僧侶はたいがいの家の中に入って行くことができる。そして仏壇にたどり着き、家人と話ができる。定期的に訪問するので、その気になれば家の中の様子が定点観測できる。「もしかして、子どもが虐待されている」、「このところ夫婦仲がよくない」などと気付く。仏壇でお経を読んだあと、ちょっと話しかけてみたらどうだろう。ふと気が楽になって、悩みを語り出す人もいるのではないか。

檀家に出向くばかりではない。お寺には立派なファシリティがある。本堂の広く快適な空間には、マイクもあるし座布団もある。水回りも完備し、冷暖房も入っている。昼間は開放して地域のサロンやNPOの活動拠点にできないか。

尼さんの配備

ところで、悩みを聞く役なら、オジサン僧侶よりも、瀬戸内寂聴氏のような尼さんの方がいいのかもしれない。女性は女同士の方が話しやすいだろう。葬式仏教や副業の方はオジサン僧侶に任せ、相談、カウンセリングなどのNPO活動の方は通いでやってくる尼僧に分担してもらおうというビジネスモデルはどうか。

以上、葬式仏教だのNPOだのと申し上げて来たが、これからの時代、お寺はもっと積極的に役割を果たすべきだ。日本の仏教、そしてお寺は6世紀以来、約1400年もの間、したたかに姿を変えて生き延びてきた。そして日本人の生活に深く根ざしている。戦後は駐車場や保育園を経営するなど、ビジネスセンスも大したものだし、お坊さんはやはり賢い人たちだ。だからこそもう一步踏み出して、徳川以前、いや、もっと遡って、仏教伝来期の奈良時代の姿、つまりNPOとしてのお寺の役割を再構築すべきではないか。

人に真向かえば、檀家寺の未来も明るいのではないか。そして、たった1人の自殺未遂者でも救うことができたなら、それこそが僧侶の道を選ばれた本望となるのではなかろうか。

(注)なお、このレポートの執筆にあたっては慶應SFCキャンパスの上山研究会(経営戦略ゼミ)で2008年春学期に行った「お寺分析チーム」(佐藤仁美、山本華佳、指田直孝、上田誠之)の成果を参考にした。

(構成:片瀬京子)

このコラムについて

上山信一ゼミの すぐそこにあるブルーオーシャンを探せ